

T a d a h i k o H a y a s h i A w a r d

社会は心を撃つ写真をさがしています

第
28
回

林
忠
彦
賞

Otari-Pristine Peaks 山霊の庭

野村 恵子



主催／周南市文化振興財団 共催／**KRY山口放送** 後援／読売新聞社 協賛／富士フィルム株式会社

<http://hayashi-award.com/>

2019

林忠彦賞は、山口県周南市出身の写真家林忠彦の功績を顕彰し、写真文化の振興を目的に、1991年(平成3)故郷である周南市と周南市文化振興財団が創設いたしました。生誕100年という記念の年にあたり、昨年11月には周南市美術館で「生誕100年 林忠彦展」を開催したところでございます。

本賞は、林忠彦が晩年アマチュア写真家の育成に力を注いだことから、当初はアマチュア写真の振興を目的としてスタートいたしました。その後、写真がデジタルへと急速に変化するなど、技術や表現形態が多様化していったことを受け、より多くの写真家に支持される賞へと少しずつ見直しを図ってまいりました。そして現在では、林忠彦が「太宰治」「坂口安吾」などの作品で戦後の写真界に颯爽と躍り出た、最もエネルギー溢る時代に照準を合わせ、社会が求める、その時代を一番象徴する写真を選び出そう、をコンセプトとしています。

「社会は心を撃つ写真をさがしています」のキャッチフレーズのもと、写真表現者すべてに門戸を広げ、林忠彦の精神を受け継ぎ、それを乗り越え未来を切り開く写真家を発掘する賞をめざしているところです。

28回目となる今回は、去る1月29日に選考委員会が行われ、103点の応募作品の中から厳正な審査の結果、野村恵子さんの「Otari-Pristine Peaks 山霊の庭」が受賞作に決定いたしました。

野村さんは兵庫県神戸市のご出身で、大学を中退後、大阪写真専門学校(現:ビジュアルアーツ専門学校・大阪)に入学されました。卒業後渡米し、ロサンゼルスやサンタフェで写真を学ばれました。1995年に帰国した後ベトナムで撮影を始め、1996年には初の写真展「越南花眼」を開催、以後、本格的に写真家として活動を始められました。1997年にコニカブラザ「新しい写真家登場」特別賞受賞、1999年に沖縄をテーマにした「DEEP SOUTH」で日本写真協会賞新人賞、2000年には東川賞新人作家賞を受賞されました。現在は、東京を拠点に活動をされています。

受賞作の「Otari-Pristine Peaks 山霊の庭」は、北アルプスの小さな集落、長野県の小谷村を4年の歳月をかけて撮影した作品です。厳しい自然の中で狍をし、いのちと向き合いながら生きていく人々の姿が、強く印象に残ります。便利さや合理性を追求しがちな現代社会において、人間の生き方を原点に戻って考えさせる作品として、選考委員会でも高く評価されました。

野村さんには心からお祝いの言葉をお贈りさせていただきますとともに、今後のさらなるご活躍を期待いたします。

受賞作品は山口放送株式会社、読売新聞社、富士フィルム株式会社をはじめ、関係各位のご協力を得て、東京、周南市と巡回展示し、オリジナルプリントは周南市が林忠彦コレクションに含めて永久に保存いたします。

林忠彦賞は、多くの方々のご協力によって発展して参りました。今後とも引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

周南市文化振興財団理事長
周南市長

木村 健一郎



林忠彦
(1918~1990)

わが国の写真文化の発展において、林忠彦は木村伊兵衛、土門拳、渡辺義雄各氏などの先輩写真家とともに日本写真家協会設立に尽力する一方、1953年(昭和28)には二科会写真部を創設し、以後全国のアマチュア写真家の資質向上のため終生尽力した。こうした氏の遺志を生かしてアマチュア写真の振興を目的に、1991年(平成3)林忠彦賞を設立した。

第12回からは、デジタル化の急速な進歩により多様化する表現形態に対応するため、新しい写真表現を目指す作家の参入も推し進めた。

さらに第18回より、これまでの経験をもとに、対象をプロ作家にまで広げ、時代と共に歩む写真を撮り続けた林忠彦の精神を継承し、それを乗り越え未来を切り開く写真家の発掘を目指す賞へと拡大した。

募集要項

資格：国内居住であれば、アマチュア、プロ、年齢、性別、国籍を問いません。

テーマ：自由

対象：2018年(1月1日~12月31日)に写真展、写真集、雑誌、公募等の表現媒体ですでに発表された作品。受賞記念写真展を開催する関係上、35~70枚程度の写真で構成された作品(同一テーマによるもの)。

「写真展」での応募

- ・「写真展」で展示した作品のプリントをお送りください。(展示していない作品は対象外となります。再プリント可。)
- ・プリントの代わりに同作品の「写真集」をお送りいただくことも可能です。(その場合は展示した作品がわかるように明記。)
- ・「写真展」の会場内でポートフォリオなどを置いていた場合は、そのプリントも展示作品として含めることができます。
- ・巡回展示や会期中展示替えがあった場合は該当プリントがわかるように明記してください。
- ・資料として、写真展の「案内ハガキ」や「展示風景の写真」などを添付し、発表時期や状況がわかるようにしてください。

「雑誌」「公募」などでの応募

- ・掲載誌あるいは発表した作品のプリントをお送りください。(発表していない作品は対象外となります。再プリント可。)

- ・発表状況がわかる資料「案内ハガキ・チラシ」などを添付してください。
- ・プリントの代わりに同作品の「写真集」をお送りいただくことも可能です。(その場合は発表した作品がわかるように明記。)

「写真集」での応募

- ・そのまま「写真集」をお送りください。
- ・資料としてプリントを添付されても構いません。(その場合は写真集に掲載されているプリントのみが対象です。)

「プリント」

- ・六つ切から四つ切程度(インクジェットプリントも可。)
- ・できるだけファイリングした状態でご応募ください。(ファイリングできない場合は、裏面に順番を明記。)

「応募用紙」

- ・応募用紙に、住所・氏名・略歴等を明記し、制作の主旨を400字以内にまとめてお送りください。(自作可。)

「選考発表」

選考後、受賞者に通知するとともに各報道機関に発表します。(2019年2月21日発表)
授賞式は東京で行い、東京と周南市において受賞記念写真展を開催します。受賞作品は主催者が保存のため、銀塩ペーパー・全紙サイズで再制作し、林忠彦コレクションとして周南市美術館に永久保存します。

「作品の返却」

返却方法は、受取人着払いの宅配便となります。ただし、最終候補作品については、資料として作品をご提供いただく場合があります。

「個人情報」

ご記入いただいた個人情報は、林忠彦賞に関する業務以外には使用しません。

「応募・問合せ先」

林忠彦賞事務局 〒745-0006 山口県周南市花畠町10-16
(周南市美術館) TEL 0834-22-8880 FAX 0834-22-8886

「選考委員」

大石芳野(写真家)
笠原美智子(公財)プリチストン美術館副館長)
河野和典(公社)日本写真協会出版広報委員、日本カメラ社編集顧問)
細江英公(写真家、清里フォトアートミュージアム館長)
有田順一(周南市美術館館長) 敬称略・五十音順

【締切】2018年(平成30年)12月31日(月) 必着

【賞】ブロンズ像(笹戸千津子作「爽」)及び賞金100万円

募集要項・歴代受賞作品など詳しくはホームページをご覧ください。応募用紙のダウンロードもできます。

<http://hayashi-award.com/>



写真集「Otari-Pristine Peaks 山霊の庭」

野村恵子(のむら・けいこ)



「Otari-Pristine Peaks 山霊の庭」は、北アルプスの小さな集落、信州長野県の小谷村(おたりむら)を4年の歳月をかけて撮影した作品である。真冬には2メートルの豪雪にもなる厳しい自然の中で、山の恵みを糧に暮らす人々や自然の風景を、作者は本能のままにシャッターを押し続けた。研ぎ澄まされた眼差しと優れた色彩感覚で表現された作品は、山に生きる人間と生き物の関係をとらえ、彼女自身の小谷村を表現したとして、選考委員会で高く評価された。煩雑な現代社会に生きる私たちに、いのちと向き合う、いのちをつなぐとはどういうことなのか、人間の生き方の根本について考えさせる作品である。

経歴

兵庫県神戸市生まれ

1994年 同志社女子大学英文学部中退
大阪写真専門学校(現・ビジュアルアーツ専門学校・大阪)卒業
渡米し、ロサンゼルス、サンタフェでワークショップ等で写真を学ぶ

1995年 帰国、ベトナムの撮影を開始

1996年 個展「越南花眼」(WTCコスモギャラリー・大阪)

1997年 コニカプラザ「新しい写真家登場」特別賞受賞
個展「越南花眼」(新宿コニカプラザ・東京)

1998年 個展「夢のもつれ-沖縄」(新宿コニカプラザ・東京)

1999年 個展「Deep South」(パルコギャラリー・東京/パルコギャラリー・名古屋)
写真集「DEEP SOUTH」(リトル・モア)
グループ展「水戸アニュアル '99 プライベートルームII - 新世代の写真表現」(水戸芸術館・茨城)
日本写真協会賞新人賞受賞

2000年 東川賞新人作家賞受賞

2001年 写真集「RUSH」(共著)(リトル・モア)

2002年 個展「Bloody Moon」(新宿コニカプラザ・東京/ビジュアルアーツギャラリー・大阪)
グループ展「琉球烈像 - 写真で見るオキナワフォトネシア/光の記憶・時の果実 復帰30年の波動」(那覇市民ギャラリー・沖縄)
グループ展「第3回ドキュメンタリーフォトフェスティバル宮崎」(宮崎県立美術館・宮崎)

2004年 写真集「In-between 6 イタリア・スウェーデン」(EU・ジャパンフェスト日本委員会)

2006年 個展「Bloody Moon - うまれるまえみたひかり」(冬青社ギャラリー・東京)
写真集「Bloody Moon」(冬青社)

2008年 グループ展「目黒在住の新進芸術作家展」(目黒区美術館・東京)
グループ展「愛する時と憎む時展」(沖縄県立博物館・美術館・沖縄)



2009年 個展「Red Water」(EMON Photo Gallery・東京)
写真集「Red Water」(アートビートパブリシャーズ)

2012年 個展「Soul Blue 此岸の日々」(プレイスM・東京)
写真集「Soul Blue 此岸の日々」(silverbooks/赤々舎)

2013年 個展「Soul Blue 此岸の日々」(Poetic Scape・東京/ビジュアルアーツギャラリー・NADAR・大阪)

2014年 個展「赤い水」(ニコンサロン銀座/ニコンサロン大阪)

2016年 グループ展「日本の新進写真作家展」(東京都写真美術館・東京)
写真集「DROP OF LIGHT TO RUSHING WATER」(Pierre von Kleist editions)

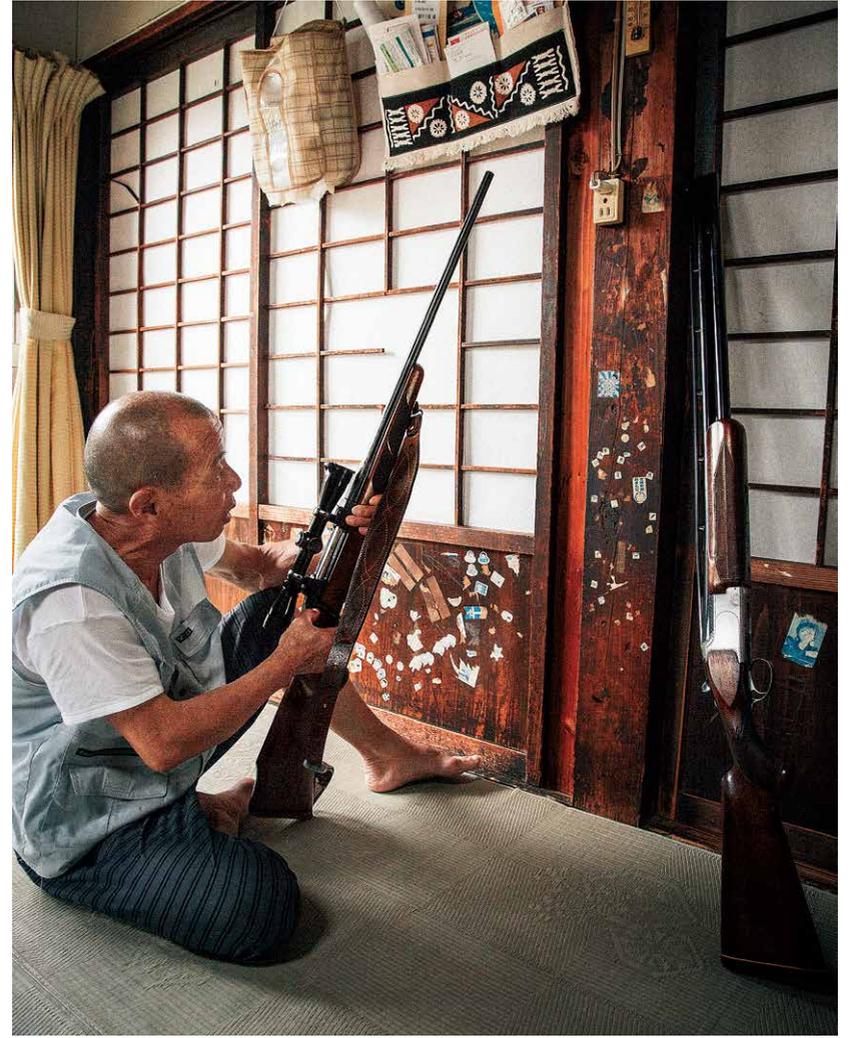
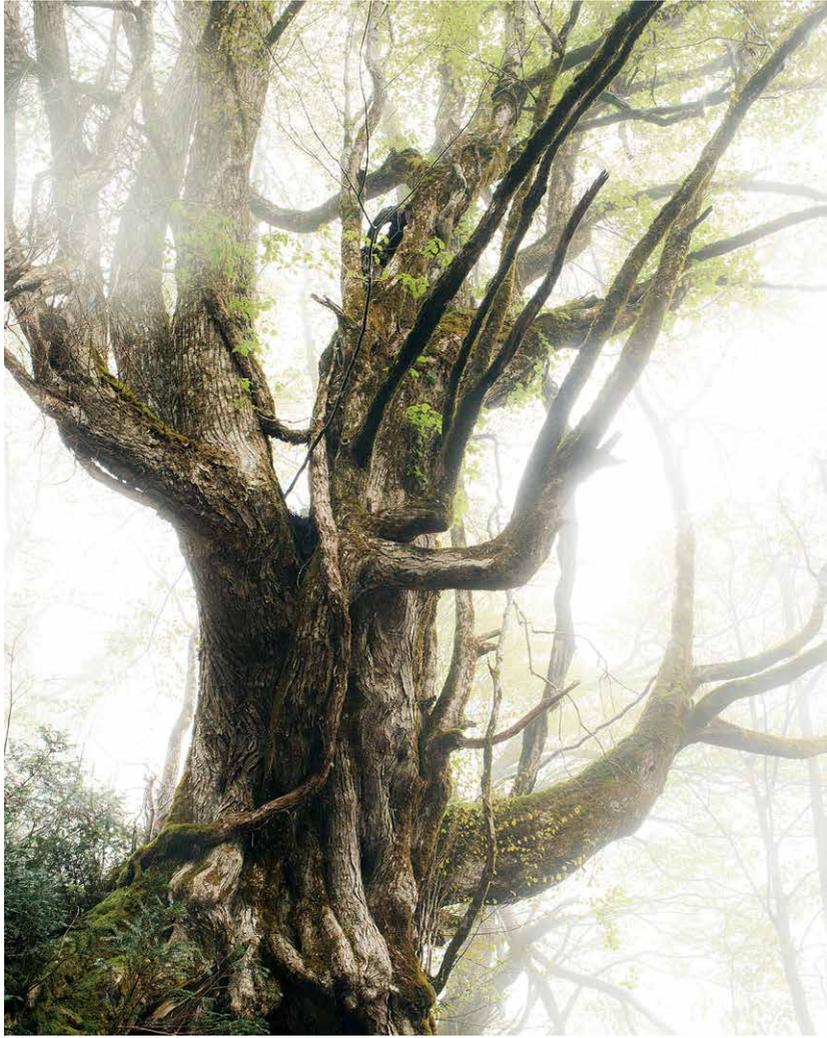
2017年 個展「Drop of the light, Rushing Water」(MARÛTE GALLERY・高松/Space One・ポルトガル)
グループ展「写真家が見た沖縄展」(沖縄県立博物館・美術館・沖縄)
写真集「OKINAWA」(Pierre von Kleist editions)

2018年 個展「OKINAWA」(Poetic Scape・東京)
古賀絵里子と二人展「Life Live Love」(入江泰吉記念・奈良市写真美術館)
写真集「Otari-Pristine Peaks 山霊の庭」(スーパーラボ)

コレクション 東京都写真美術館
沖縄県立博物館・美術館
東川町文化ギャラリー
清里フォトアートミュージアム

現在、東京を拠点に活動

🐦 <https://twitter.com/keikeinomunomu>
📷 <https://www.instagram.com/nomurakeiko/>
🌐 <https://www.keikomura.com/>



※一部に狩猟の獲物など刺激の強い写真があります。

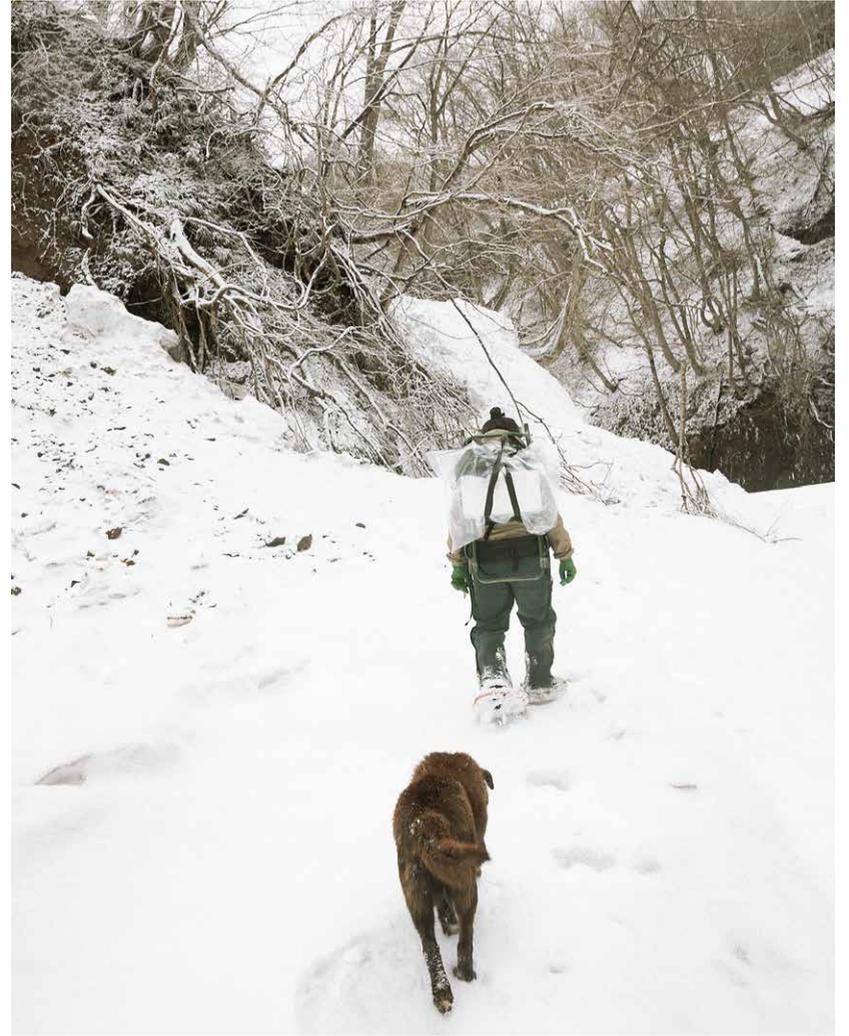


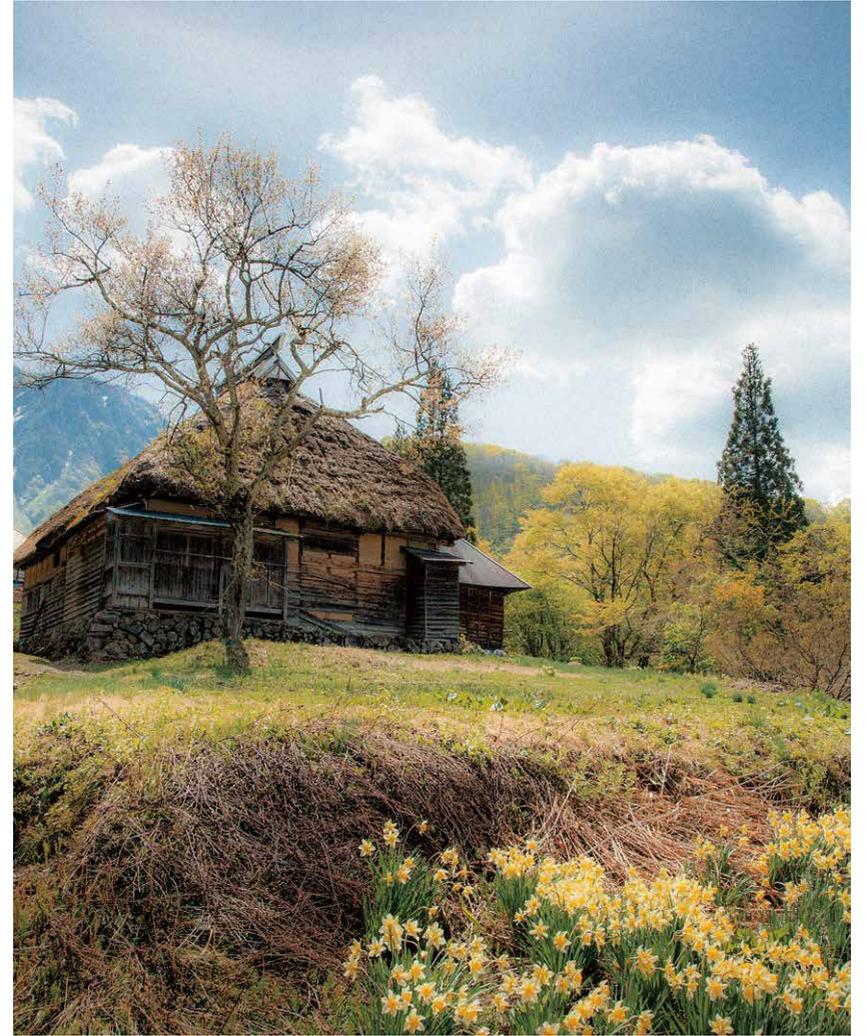




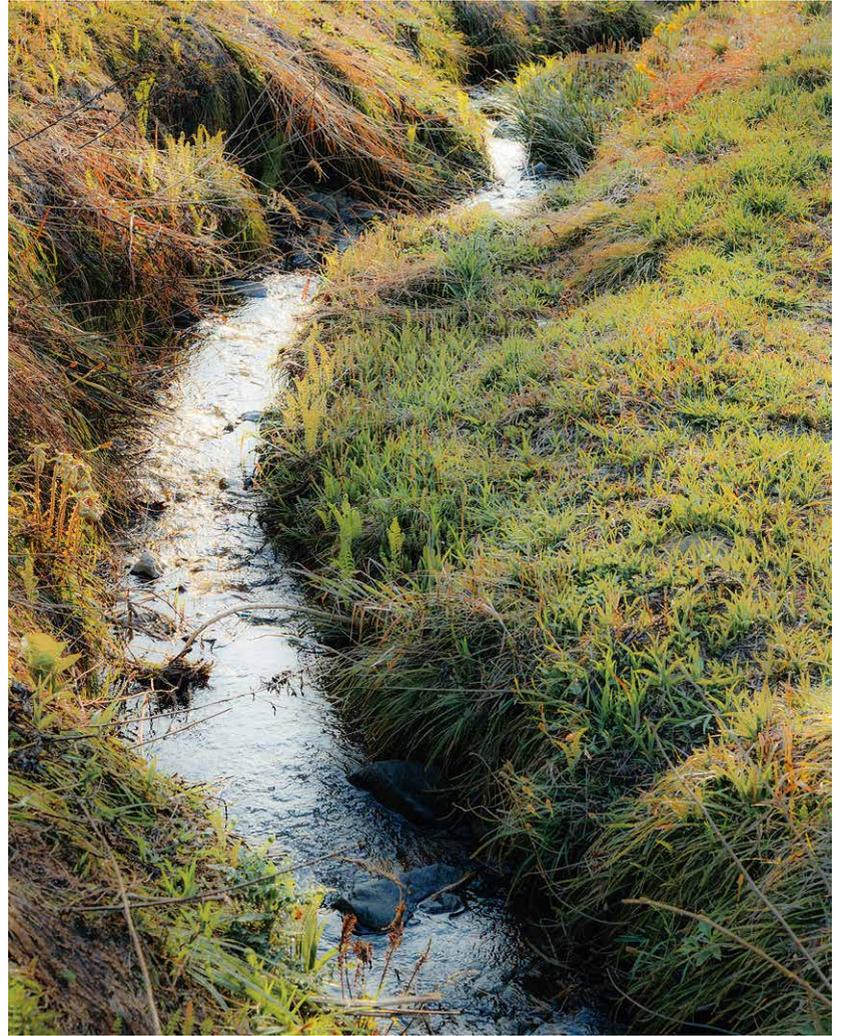












「潜伏と祈り」(写真集・写真展)

池田 勉

(いけだ・つとむ)

「アオノニマス 廻」(写真集・写真展)

柿崎 真子

(かきざき・まさこ)

「密怪生命」(写真集・写真展)

佐藤 岳彦

(さとう・たけひこ)

「沼の婆さんの言い伝え」(写真集・写真展)

鈴木 賢武

(すずき・よしたけ)

「Otari-Pristine Peaks 山霊の庭」(写真集)

野村 恵子

(のむら・けいこ)

「隣人、それから。38度線の北」(写真集・写真展)

初沢 亜利

(はつざわ・あり)

「KOTOHIRA」(写真集)

溝縁 真子

(みぞぶち・まこ)

「我が家」(写真展)

山本 雅紀

(やまもと・まさき)

「クリシタンの里一祈りの外海」(写真集)

吉永 友愛

(よしなが・ともなり)

(敬称略・五十音順)

委員長 細江 英公

一年で一番大事な林忠彦賞の審査が終わったばかりです。写真の審査は一言では言えません。あるものは楽しく、あるものは苦しい。林忠彦賞の選考は写真を見ていると重圧を感じます。そのくらい皆さんの魂をつぎ込んだ作品がたくさんありました。

林忠彦賞ができて28年になります。林忠彦先生は日本を代表する写真家で、その存在は日本の写真界の中で重要なものです。林先生が戦後の写真界で果たした役割は大きいと思います。特に印刷物や雑誌等に関わりを持った写真家の中でも重要なポジションにいらっしやいました。もちろん写真雑誌で果たされた役割は大きかったのですが、写真に縁の無い方々が読者である「小説新潮」や「婦人公論」「文藝春秋」など、一般向けの雑誌の中で先生の果たされた役割は大きかったと思います。林先生は日本における写真ジャーナリズムの先駆者です。戦後の雑誌ジャーナリズムにおける写真の重要な役割を、林先生は担っておられました。

その林先生の名を冠した林忠彦賞に選ばれた野村恵子さんの『Otari-Pristine Peaks 山霊の庭』はインパクトのある良い作品でした。野村さんは信州小谷村の山奥に行き写真を撮られました。山に暮らす人びとや狩猟で撃ち殺された動物たちの姿は印象的です。そこには現代ではあまり目にするものなくなった直接的な命のやりとりがあります。いつか失われてしまうかもしれないこうした人びとの生活を、我々はこの写真集によって得たい記録として持つことができるのだと思います。

周南市が林忠彦賞を創設され、いろいろとご苦労もあったのでしようけれど、これを毎年行われ今日まで続けてこられたことは周南市民の大きな誇りであると思います。

委員 大石 芳野

今年もたくさんの写真を見させていただき、ありがとうございました。審査をするということは、自分が試されているようで、いつもとても緊張感を覚えます。100点ほどの作品が並べられていますが、良い作品が多くてかなり迷いました。去年に比べると、たとえば東北の震災から間近の年には震災をテーマにしたものや、直接的ではなくても強く意識した写真が目につきましたが、今年はかなり減ったように思いました。そのなかで、「フクシマノート」は7年間のフクシマをしっかりとドキュメントしながら写真表現化してまとめています。

林忠彦賞の野村恵子さん『Otari-Pristine Peaks 山霊の庭』。これは山の霊を写真化したという作品です。山の霊とは何か、もちろん植物と動物などの霊を慰めるものです。山で生きているたくさんの動物がマタギによって撃ち殺され、その死体になった動物たちが雪の山中で、あるいは夏草山の中で血を流している。そうした霊に慰められながら人間も生きていく。妊婦の登場は森羅万象のあらゆる霊に守られながら人間もまた新しいいのちが生まれることの象徴でしょう。ドキュメンタリー写真ではなく、作者がイメージした思考をアートの的に組み合わせて相乗効果を狙った独特な写真です。林忠彦さんの写真からは遠い作品かもしれませんが、将来が期待される作家だと思えます。

『隣人、それから。38度線の北』は、初沢亜利さんが北朝鮮の生活を撮ったものです。国家がPRしたい写真も一般的には多々ありますが、これは違っていて、作者がふと目にしたものを撮っている。北朝鮮の人びとの普段の暮らしをよく目を凝らして撮っています。それだけに、北朝鮮のある種の真実が伝わ

てくるドキュメンタリー写真です。

吉永友愛さんの『キリシタンの里一祈りの外海』。長崎のキリシタンの里に数十年間通って撮影しています。これは野村さんとは対照的な写真の撮り方であり表現の仕方です。階段を上る曲がった腰のおばあさんを見つめているマリア像、この2枚を組み合わせた写真集の見開き頁にはキリシタンの歴史も含めて深いものを感じます。村また村の高齢化社会で、キリシタンを守る人びとの努力も伝わってきます。いわゆる宗教臭さは無く、ひたすら村人の固有の暮らしの姿が写っています。過疎化の波にのまれそうになりながらも守って継承しようとする姿を、時間をかけて丁寧に撮影した写真から、日本中にもこうした村々が随所にあることを考えさせられます。

鈴木賢武さんの『沼の婆さんの言い伝え』も、撮り方は違いますが『キリシタンの里一祈りの外海』とテーマは似ています。昔、この村にいたお婆さんの言い伝えがあるよ…、といったことの写真化です。ハイキー調やぼかししたり画面を斜めにして撮ったりするなどの手法ではなく1枚1枚を丹念に、それでいて淡々と撮っていることでこの村の暮らしが見る人たちに素直に伝わってきます。

委員 笠原美智子

2019年の林忠彦賞の審査をさせていただきました。100点に及ぶ作品を見せていただいたんですけど、全体の印象としてはそれぞれの作家、写真家の方たちが非常に写真が上手くなっている、言い方がちょっと難しいのですがそういう印象を持ちました。けれども、上手い写真なのに何となくつまらないというか、見たことがある写真が一杯あるなあというのがまず全般的な印象でした。そんな中で最後まで残ったのは、一つ一つのテーマによって作家が自分の世界を築き上げている、そんな人だったと思います。

林忠彦賞に選ばれた野村恵子さんの作品『Otari-Pristine Peaks 山霊の庭』。信州の小谷村を撮っているんですけど、これは別に小谷村のドキュメンタリーを撮っているわけではないんですね。野村恵子さんが、自分自身の身体を通して野村恵子の小谷村を作り上げている、そういう作品だと思います。彼女自身の自分の世界を被写体たちを通して表している。そしてそういう時には、この被写体たちがどちらかというところ搾取されているような感じに映るときがあるんですけど、彼女自身の作品を創りながらこの被写体たちも生き生きと生かしているというところが、私がこの作品に惹かれた理由です。

初沢亜利さんの作品もとても印象に残りました。初沢さんはもうここ10年以上フォトジャーナリストとして第一線で活躍されている方です。特にイラクであるとかジャーナリストでも行くのをためらうような所、その中に入って伝えています。初沢さんには独特な世界があって、今回の『隣人、それから。38度線の北』という作品も北朝鮮を撮っているのですが、北朝鮮の特殊性を強調し、それで人の目を惹こうとするジャーナリズムではなく、北朝鮮の一般の人たちの日常生活に寄り添って撮っているような作品で、色々と極端な情報が伝えられやすい国のドキュメンタリーとしては、非常に彼自身の北朝鮮の事情が伝えられて良いなと思いました。

私が今回審査をして一番の収穫だなと思ったのは、『KOTOHIRA』という作品を撮った溝縁真子さんです。香川県の金刀比羅に住む祖母の家を撮っている非常にプライベートな作品なのですが、祖母が不

在の家の中に祖母のありかを、存在を感じさせる作品です。彼女自身はまだ非常に若いのですが、自身の作家性というものを確立している作家さんだと思います。

委員 河野和典

まず全体的なことからいいますと、序盤はなかなか目に突き刺さるような作品が見当たらず、どうなることかと心配されましたが、選を進めるにつれて徐じよにめぼしい作品が出てきて、最終的には10点くらいの秀作が並びほった次第です。今年は特にドキュメンタリーがいいとかアーティスティックな作品が優れているとかというよりも、それぞれのテーマに基づいた、切り口の鋭い作品が残ったと感じています。

その中から今年の林忠彦賞に選ばれたのが、野村恵子さんの『Otari-Pristine Peaks 山霊の庭』でした。彼女の特長は新人時代から大らかで、しかも腰の据わった、そしてシャープな切れ味を示すのが特長でしたが、今や新人から中堅となって、それが一層パワーアップされたようです。今回の写真集作品は、山深い自然に囲まれた信州小谷村での撮影だそうです。自然の摂理が根底に流れる中、そこに暮らす人々の生活が骨太に、そして哲学的に、まるで“生命のリズム”を刻むかのように、シャープにとても色彩豊かにとらえられた秀作です。

次に、私が次点候補として選んだのは、佐藤岳彦さんの『密怪生命』です。佐藤さんは写真集『生命の森 明治神宮』および『変形菌 (Graphic voyage)』で2018年度日本写真協会賞新人賞を受賞された今注目の人です。自然科学分野の作品で林忠彦賞にはそぐわないと思われるかも知れませんが、写真を通じて常に新しい発見を求めていた林忠彦さんのことを思えば、ジャンルは問題ではないと思います。前作の『生命の森 明治神宮』『変形菌 (Graphic voyage)』を上回るスケール豊かな作品で、ミクロからマクロまで、時間をかけてじっくりと取り組んで写真のダイナミズムを表して強烈です。尋常では撮れない彼のエネルギーの強さを感じさせられます。

続いては、吉永友愛さんの『キリシタンの里一祈りの外海』があります。吉永さんは74歳と今回の応募者の中では高齢の方ですけど、それが逆に、さすが年の功といえますか、渋い題材にもかかわらずとらえ方が俯瞰ありクローズアップありと非常に柔軟で、キリシタンの里のあり様を非常に柔らかなタッチで表現されて、とても好感が持てる作品でした。

それから初沢亜利さんの北朝鮮をとらえた『隣人、それから。38度線の北』。初沢さんは「沖縄のことを教えてください」で東川賞新人作家賞と日本写真協会賞新人賞を受賞した方ですが、その作品は一貫して非常に初々しく新鮮なことです。一般に報道されている北朝鮮とは違って、そこに暮らす人々のんびりとした柔らかさが率直にとらえられていて見る人を和ませます。

最後は、ちょっと変わっている、いや、だいが変わっている山本雅紀さんの『我が家』。写真が究極的には自画像であるとするれば、家族をもって自分の自画像を表したといってもいいような、家族と自分が一体になって自分の生き様を表した作品です。ドキュメンタリーとかアーティスティックな作品は普通、自分からちょっと遠ざかったところをとらえるような雰囲気がありますけれど、山本さんの『我が家』は、まさに自分と家族が一体となって、もうすべてをさらけだした“家族写真”です。なかなか出来るように出来ない見事な作品だと思います。

委員 有田 順一

第28回林忠彦賞は、平成最後の公募となりました。

元号が変わるというのは、一時代が終わり、また新しい時代が始まるという感じに受け取られる方が多いのではないかと思います。昭和から平成の時には、確かにその雰囲気や空気感が変わったと感じたのですが…。今回も新人からベテランまで、テーマもバラエティーに富み、あれが平成の空気だった。平成最後を語るシーンだった。といわれるような作品が数多く集まっていたように思います。

さて、選考が始まった直後は、その傾向や主張などがなかなか見えてきませんでしたが、写真集、ポートフォリオ、オリジナルプリントなど、ひとつずつ手にしていくと過去のものに積み上げているもの、そのコンセプトに驚かされるもの、未来を感じさせるものとしていよいよその全容が分かってきたところです。

その中で最優秀作となったのが、野村恵子さんの『Otari-Pristine Peaks 山霊の庭』でした。取材で訪れた長野県北安曇郡小谷村の自然と生活にスポットをあてた作品です。ここは特別豪雪地帯で、戦前は林業、戦後はスキー場や大自然を生かした観光などが中心となっています。その一方で昔から続いている狩猟や伝統行事の祭り、それに点在する茅葺家屋などは、少し前の懐かしい山間部の風景そのものです。今でも当地ではマタギとともに狩猟を体験するツアーが開催されているそうです。

山は水をうみ、あらゆる命を育てている。その麓で家族と仲間と共に生き、働き、命を繋いでいく。まさに作者が思えばぐくびつた場所だったのでしょ。

印象的なのが、女性が身ごもり、いつしか子どもを背負っている映像があります。まさに野村さんの考える「時空をこえて繰り返される生命の連鎖」を象徴するシーンです。現代に生きるものに、命とは、それを繋ぐとはどういうことなのか。人間の生き方について、改めて考えさせられる好機となりました。

最終候補作品では、柿崎真子さんの『アオノニマス 廻』が目にとまりました。自身のふるさと青森を「アオノニマス」とし、その眼前に広がる土地の循環や輪廻に向き合った作品です。風景や地形が構成的に組み合わせられ、見るたびにまた新しい感情が沸き起こってくる不思議な感覚の作品でした。

また今回は、2018(平成30)年7月、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されたことから、長崎がテーマの2作品が残りました。ひとつは池田勉さんの『潜伏と祈り』です。長崎、天草地方の潜伏キリシタン集落を後世に残したいと、10年の歳月を掛けてまとめられたものです。地元を知り尽くした作者ならではの精神性と記録性には感心させられました。また、先に講評が出ておりますが、吉永友愛さんの『キリシタンの里一祈りの外海』も思いがよく伝わってくる作品でした。

最後に、今回は、新元号のもと、また新しい時代がやってきます。林忠彦賞は、時代とともに歩む賞です。「社会は心を撃つ写真をさがしています」。このキャッチフレーズは、これからも走り続けます。次は、ぜひあなたの目で新時代を切り取ってください。

これらの講評は、選考直後のインタビューに、後日各選考委員により加筆、修正を加えたものです。



選考委員

日本写真協会賞

公益社団法人日本写真協会は、写真を通じて国際親善の推進と文化の発展に寄与することを目的として、1952年(昭和27)に設立された日本で最も権威のある写真団体です。

「日本写真協会賞」は、日本写真協会が、日本の写真界や写真文化に顕著な貢献をした個人や団体に対して贈る賞で、国際賞、功労賞、文化振興賞、年度賞、作家賞、学芸賞、新人賞の各賞があります。

林忠彦賞は、地域における写真文化の振興に顕著な貢献をしたとして、1996年(平成8)「文化振興賞」を受賞しました。



文化振興賞で授与されたブロンズ像
松永 真「メタルフリーズ」

大石 芳野 (おおいし・よしの)

東京都生まれ。日本写真家協会、日本民族学会、日本ペンクラブ会員。日本大学客員教授。日本大学芸術学部写真学科卒業後フリーの写真家となる。戦争や内乱後の人々の姿に視点を向けたドキュメンタリー作品を手がけ、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどで取材を行う。

受賞 — 1982年(昭和57)日本写真協会年度賞。1990年(平成2)講談社出版文化賞、アジア・アフリカ賞、1994年(平成6)芸術選奨文部大臣新人賞。2001年(平成13)『ベトナム凜と』で第20回土門拳賞。2007年(平成19)紫綬褒章。2014年(平成26)『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』でJCJ賞(日本ジャーナリスト会議)他。写真集 — 2005年(平成17)『子ども 戦世のなかで』(藤原書店)。2011年(平成23)『それでも笑みを』(清流出版)。2013年(平成25)『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』(藤原書店)。2015年(平成27)『戦争は終わっても終わらない』(藤原書店)。2016年(平成28)『沖繩 若夏の記憶』(岩波現代文庫)。2019年(平成31)『戦禍の記憶』(クレヴィス)、『長崎の痕(きずあと)』(藤原書店)他。

笠原 美智子 (かさはら・みちこ)

1957年(昭和32)長野県生まれ。明治学院大学社会学部卒業。シカゴ・コロンビア大学大学院修了。1989年(平成元)から東京都写真美術館学芸員。2006年から2018年まで、同館事業企画課長。2018年(平成30)4月1日より公益財団法人石橋財団ブリヂストン美術館副館長。著書に『ジェンダー写真論 1991-2017』『写真、時代に抗するもの』『ヌードのポリティクス』など。主な展覧会企画に、1996年(平成8)『ジェンダー、記憶の淵から』展、1998年(平成10)『ラヴズ・ボディ―ヌード写真の近現代』展、2001年(平成13)『手探りのキス、日本の現代写真』展、2008年(平成20)『オン・ユア・ボディ 日本の新進作家』展、2010年(平成22)『ラヴズ・ボディ―生と性を巡る表現』展、2012年(平成24)『日本の新進作家vol.11 この世界とわたしのどこか』展、2017年(平成29)『ダヤニータ・シン インドの大きな家の美術館』展、2018年(平成30)『愛について アジアン・コンテンポラリー』展等。2005年(平成17)第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッションナーとして『石内都 マザーズ2000-2005』展を企画。

河野 和典 (こうの・かずのり)

1947年(昭和22)鳥取県生まれ。1969年(昭和44)(株)日本カメラ社入社。1971年(昭和46)より月刊『日本カメラ』編集部。この間、『名機を訪ねて』(那和秀峻著)、『レンズ汎神論』(飯田鉄著)、『目からウロコ』(杉浦康平、若桑みどり、筑紫哲也、上野千鶴子、森村泰昌、池澤夏樹、石川好、竹村和子、中沢新一、小森陽一共著)などの単行本や別冊『ポラロイドの世界』を手がける。1999年(平成11)から2004年(平成16)まで月刊『日本カメラ』編集長。2008年(平成20)独立、スタジオレイを設立。2013年(平成25)から公益社団法人日本写真協会の出版広報委員、理事に就任し、『日本写真協会会報』『日本写真年鑑』編集に携わる。

細江 英公 (ほそえ・えいこう)

1933年(昭和8)山形県生まれ。1954年(昭和29)東京写真短期大学(現:東京工芸大学)写真技術科卒業。1956年(昭和31)の第1回個展『東京のアメリカ娘』以来、海外、国内で写真展を多数開催。作品集に『おとこと女』『薔薇刑』『鎌鼬』『ルナロッサ』など多数。

1970年(昭和45)芸術選奨文部大臣賞、1998年(平成10)紫綬褒章、2003年(平成15)英国王立写真協会創立150年記念特別賞、2007年(平成19)旭日小綬章、2008年(平成20)毎日芸術賞受賞。2010年(平成22)文化功労者。2017年(平成29)旭日重光章受章。東京工芸大学名誉教授、1995年(平成7)より清里フォトアートミュージアム館長。

有田 順一 (ありた・じゅんいち)

1955年(昭和30)山口県周南市生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。1983年(昭和58)周南市文化振興財団勤務。1991年(平成3)林忠彦賞創設から事務局兼務。2010年(平成22)周南市美術博物館館長。林忠彦、秋山庄太郎、緑川洋一、細江英公、立木義浩、星野道夫、岩合光昭等の展覧会を担当。その他、周南市出身の洋画家 宮崎進、詩人 まどみちおの顕彰活動を推進する。2018年(平成30)『生誕100年 林忠彦展』を企画。

(敬称略・五十音順)

歴代選考委員

秋山 庄太郎 (あきやま・しょうたろう) 写真家

植田 正治 (うえだ・しょうじ) 写真家

大竹 省二 (おおたけ・しょうじ) 写真家

岡井 耀毅 (おかいてるお) 写真ジャーナリスト

齋藤 康一 (さいとう・こういち) 写真家

立木 義浩 (たつき・よしひろ) 写真家

田沼 武能 (たぬま・たけよし) 写真家

中村 正也 (なかむら・まさや) 写真家

奈良原 一高 (ならはら・いっこう) 写真家

緑川 洋一 (みどりかわ・よういち) 写真家

森川 紘一郎 (もりかわ・こういちろう) 元周南市美術博物館館長

渡部 雄吉 (わたべ・ゆうきち) 写真家 (敬称略・五十音順)



「カシュガル(喀什)」

第1回
「西域—シルクロード」(写真集) 後藤正治(ごとう・まさはる)

1946年(昭和21)東京都生まれ。祖父、父の影響で小学校から写真を始め、植田正治氏に師事した後、シルクロードをテーマに撮影を開始。1995年(平成7)より仏教をテーマとして撮影開始。写真集『パゴダの国』出版。2001年(平成13)第25回全国高文連写真部門審査委員長。写真展開催、写真集出版多数。島根県在住。

作品は非常に格調も高く、作家の写真に対する真摯な情熱と、その作品集の持つ説得力に、選考委員長として敬意を表したい。いずれにしても、絶賛に値する作品が第1回目の林忠彦賞に選ばれたということは誠に慶賀すべき出来事だと思います。

web http://www.dialand.co.jp/public_html/

blog <http://blog.goo.ne.jp/gotoh1031>



「山羊と少年
折々の詩」

第2回
「田園の微笑」(写真集) 捧武(ささげ・たけし)

1933年(昭和8)新潟県生まれ。1955年(昭和30)頃から田園の風俗を撮り始める。1958年(昭和33)新潟県アマチュア写真連盟発足。以後30年にわたり事務局担当。1964年(昭和39)新潟県展にて審査員の林忠彦から奨励賞受賞。以後、県展や新潟二科展で入選入賞を重ねるなど活躍した。2007年(平成19)新潟県写真芸術協会発足、初代会長に就任。2010年(平成22)死去。

30年もの歳月をかけ写真集を作り上げた捧武さんの作品が選考委員の皆さんの支持を得たということは、生前、特に晩年に林さんがおっしゃっていた「写真は記録であることを痛感した」という言葉に照らし合わせても、非常に妥当であったと思います。



「黒田家(小笠町) 堀をめぐらせた代官屋敷」

第3回
「静岡の民家」(写真集) 木村仲久(きむら・なかひさ)

1938年(昭和13)静岡県生まれ。日本大学工学部土木工学科卒業後、静岡県庁勤務。全日本写真連盟、二科会で活躍した。地元を中心に写真集団影法師を主宰するなど、静岡県写真界の指導的立場を務めた。故郷をテーマに写真展開催、写真集出版多数。1999年(平成11)死去。

静岡県内に点在する重要な旧家の重厚なたたずまいを、風土に生きてきた暮らしとの関わり合いで見つめたもので、格調高いカメラアイは決して単なる建築写真的なアプローチではありません。懐郷の思念も端正な構成の中に見事に抑制されて、写真家の肉声が、失われていく「家」の中を通り過ぎていきます。



「村の子供達」

第3回
「たかちほ」(写真集) 田崎力(たさき・つとむ)

1920年(大正9)宮崎県生まれ。1941年(昭和16)九州医学専門学校(現久留米大学医学部)卒業。1951年(昭和26)頃からカメラ雑誌に応募し、土門拳に指導を受ける。二科会を中心に各コンテストで活躍。1996年(平成8)宮崎県文化賞(芸術部門)受賞。医学博士。2012年(平成24)死去。

長年にわたる氏の労作の総集編ともいべきもので、神楽の里の高千穂へ注がれる眼の優しさが格別です。さりげない描写の中にも伝承の風土の哀愴が深々と生きています。記録の美しさを改めて感じさせました。



「元陸軍一等兵 重河博之
ウマル・サントス・シグワフ」

第4回
「帰らなかった日本兵」(著書) 長洋弘(ちよう・ようひろ)

1947年(昭和22)埼玉県生まれ。日本体育大学、武蔵野美術大学卒業。東京写真専門学校中退。1979年(昭和54)国際児童年記念写真展大賞受賞。1982年(昭和57)から85年(昭和60)までインドネシア・ジャカルタ日本人学校に勤務、ライフワークとなるインドネシア残留元日本兵の取材を開始する。1994年(平成6)『帰らなかった日本兵』、2007年(平成19)総集編となる『インドネシア残留元日本兵を訪ねて』刊行。他にも著書、写真展多数。埼玉県比企郡吉見町在住。

写真の力を十二分に発揮した作品といえるでしょう。一冊の本を書く作者の真摯な取材姿勢が強く伝わってきます。日本の戦後を考える上でも非常に貴重な写真的記録として評価でき、素材の力強さとしても文句のつけようがない作品でした。



「天城山 1994.10.8」

第5回
「追いつめられたブナ原生林の輝き」(写真集) 岡田満(おかだ・みつる)

1946年(昭和21)大阪府生まれ。大阪市立大学2部法学部卒業後、大阪府立生野高等専門学校に赴任、聴覚障害生徒の職業教育に携わる。大学3年の時に写真を始め、1990年(平成2)からブナに魅せられ各地の原生林を追い続ける。1995年(平成7)それらをまとめた『追いつめられたブナ原生林の輝き』刊行。その後も取材を続け現在に至る。写真展開催、写真集出版多数。大阪府大阪市在住。

とにかく、すべてにわたってしっかりしています。装丁もすばらしいし、撮影している題材も良いものです。ブナは被写体としても地味ですから、あまり扱われてきませんでしたし、なかなかこれだけうまくまとめられないと思います。

blog <http://okaman.jugem.jp/>



「チーターの子ども」

第6回
「サバンナが輝く瞬間」(写真集) 井上冬彦(いのうえ・ふゆひこ)

1954年(昭和29)東京都生まれ。東京慈恵会医科大学卒業。1987年(昭和62)初めて東アフリカを訪れサバンナの自然と動物をテーマに写真活動を始める。1996年(平成8)写真集「サバンナが輝く瞬間」刊行。現在はクリニックを開業し、医師、写真家としての眼で「生命とは何か」という問いに向き合っている。医学博士。日本写真協会会員、サバンナクラブ顧問。神奈川県横浜市在住。

サバンナの大自然の中で逞しく生き抜く野生動物たちの姿を、慈愛に満ちた温かい視線で捉え優れた写真映像に結実させており、長年にわたる作者のその努力と取材姿勢を高く評価したいと思います。

web <http://www.fuyuhiko.jp/>



「父さんの仕事場は最高の遊び場所」

第7回
「ぼくは、父さんのようになりたい」(写真展) 井上暖(いのうえ・だん)

1943年(昭和18)東京都生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業。映画のステール写真に魅せられて小学校の頃から写真を始める。1967年(昭和42)料理店経営を始める。1997年(平成9)写真展「ぼくは、父さんのようになりたい」開催。日本大学心理学科方寸会会員。東京都八王子市在住。

この作品は、自然光を生かした大判カメラによるガッシリした撮影で、その場の雰囲気と生活感を十分に取り入れ深みのある写真に仕上げられています。貧しいながらも家族の仕事に誇りを持って働く子どもたちの姿を、写真の基本ともいえる方法で取材した姿勢になにより好感が持てます。



「丙中洛(ピンツンロ)」

第8回
「天空の民」(写真集) 清水公代(しみず・きみよ)

長野県生まれ。長野県立松本嶺ヶ崎高校卒業。46歳の時写真を始める。写真家小久保善吉に師事。写真活動を通して中国大陸に魅せられ、撮影テーマを主として中国少数民族の生活と文化に定める。1993年(平成5)まで取材活動を続け、1998年(平成10)写真集「天空の民」刊行。現在もアジアにおける少数民族の生活文化をテーマに取り組んでいる。日本写真家協会会員、日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員。東京都青梅市在住。

今回の受賞については、アマチュアでありながらよくこれだけの作品ができたものだと感じました。これからも、作品作りに励んでいただきたい。



「鳥取県北条町下北条 1993年」

第9回
「Personal View [視線の範囲]」(写真集) 渡里彰造(わたり・しょうぞう)

1935年(昭和10)鳥取県生まれ。鳥取県立米子南高校卒業。長男誕生を機に成長を記録するため写真を始める。植田正治に師事。山陰写真作家集団に参加、ニッコールコンテスト、二科会写真部展で入選入賞多数。日本写真協会会員、二科会写真部会員、二科会写真部鳥取県支部支部長、鳥取県写真連盟会長、鳥取県美術展運営委員。2012年(平成24)死去。

山陰地方の日常的な光景の中から、独特の鋭い感覚とユーモラスな視点で切り取られたモノクロスナップです。自分の視点をきちんと定めてコツコツと撮り続けていけば、身の回りのものでも立派な写真になり、大きな成果に結びつくという良いお手本になったのではないのでしょうか。



「大鹿歌舞伎」

第10回
「塩の道 秋葉街道」(写真集・写真展) 竹林喜由(たけばやし・きよし)

1943年(昭和18)愛知県生まれ。静岡県立商業高校卒業。1972年(昭和47)から本格的に写真を始め、翌年写真集団影法師に入会(現在退会)。月例コンテストなどで多数入賞し頭角を現す。各所の写真講座講師を務め後進の指導にあたる。日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員、静岡ライカ倶楽部会長、静岡白黒写真同好会会長。静岡県藤枝市在住。

塩の道という歴史的な街道を丹念に取材した力作で、一つの大きなテーマに作者が精魂込めて取り組んだという情熱がストレートに伝わってくる作品です。晩年に「東海道」を上梓した林忠彦さんの業績を記念する賞に、内容的にも誠にふさわしい受賞作といって良いでしょう。

f <https://www.facebook.com/kiyoshi.takebayashi.3>



「N列車 1999」

第11回
「ニューヨーク地下鉄ストーリー」(写真展) 角田和夫(すみだ・かずお)

1952年(昭和27)高知県生まれ。高知県立高知工業高校卒業。大阪写真専門学校卒業。1988年(昭和63)「満月の夜」開催以降、写真展多数開催。1996年からは父の残した手記をもとにシベリア抑留の取材を始める。1999年(平成11)文化庁派遣芸術家在外研修でニューヨークのICP(国際写真センター)で研修を受ける。2006年(平成18)宮崎進&角田和夫2人展「シベリアから平和を考える」開催(高知県香美市立美術館)。日本写真作家協会会員。高知県南国市在住。

今回の作品はニューヨークの地下鉄を取材したもので、実に丹念に撮影しているなど感じました。地下鉄に行き交う人々の人間模様を、鋭いカメラアイでしっかりと切り取っています。一つのテーマに打ち込んで、見る者を退屈させないほどのバラエティーの豊かさも持っています。

web <http://www.kazuosumida.com/>



第 12 回
「静かな時への誘惑」(写真展) 石川 博 雄 (いしかわ・ひろお)

1951年(昭和26)愛知県生まれ。1996年(平成8)「アサヒカメラ」4月号に「風の気持ち」発表。1999年(平成11)写真展「木花物語・あなたと暮らした街」開催。以後2001年(平成13)「木花物語・風と出会った時」、2002年(平成14)「静かな時への誘惑」、2004年(平成16)「月ヲマツモノヲチヨ・越中オウラ節」2009年「手のなかの詩」等、写真展多数開催、写真雑誌にも掲載される。愛知県一宮市在住。

この作品はなかなか味わいのあるモノクロ写真です。写真にはドラマ性がなければいけないというのが僕の持論ですが、石川さんの作品はただ単にきれいに撮っただけでなく、その中に日常のドラマを感じさせます。モノクロの神髄をよく捉え、個性的で独特な写真世界を作り上げていることも見事です。

<http://blog.goo.ne.jp/gookoborettemoyukumono>



「青夏 1999年8月」

第 13 回
「海を見ていた一房総の海岸物語一」(写真集・写真展) 飯 田 樹 (いいた・たつき)

1941年(昭和16)千葉県生まれ。千葉大学教育学部卒業。1984年(昭和59)竹内敏信に師事。翌年から故郷房総の海と人をテーマに撮影を続ける。1994年(平成6)千葉県写真展グランプリ。1998年(平成10)日本写真家協会展優秀賞。写真展多数開催。2010年(平成22)第60回記念流形展竹内敏信賞受賞。日本写真協会会員、日本写真作家協会会員、流形美術会写真部委員、千葉県写真美術会顧問、千葉県写真連盟相談役ほか。千葉県東金市在住。

この作品は、千葉の房総の海をずっと撮り続けたものを一冊にまとめた作品集で、カメラワークがよく、海と人びととの関わりや、自然の表情を詩情豊かに写し出しています。その健康的な作風は現代の房総海岸に見るさまざまなドラマを表現しており、全編をとおして快い緊張感が伝わってきます。色彩的にも優れた作品です。



「古志の朝 8月 山古志村」

第 14 回
「古志の里II」(写真集・写真展) 中 條 均 紀 (なかじょう・まさのり)

1952年(昭和27)新潟県生まれ。東京農業大学卒業。1986年(昭和61)写真活動を開始。1987年(昭和62)から山古志村とその周辺の風景や風俗を取材し、1999年(平成11)写真集「古志の里」、2004年(平成16)「古志の里II」刊行。同年10月23日の新潟県中越地震で壊滅的被害を受けた山古志村の震災前姿を記録する貴重な記録となった。同年新潟県長岡市にアトリエ「Shinla—シンラー」建設。写真教室、コンテスト審査員、講演等の活動を行う。日本写真協会会員。新潟県長岡市在住。

これは、作者が山古志にずっと通い続けて撮ってきた作品で、ふるさとの素晴らしい風景を見続け、なおかつそれを撮り続けて心に残る風景写真を作りあげたこと、中越の大地震の被害により昔のような棚田が二度と見られないのではないか、そういう意味で山古志の文化財、自然の美しさが写真として残された大切な作品であると考え、いろいろな意味を込めて決定させていただきました。

<http://ameblo.jp/ateliershinla/>



「上州座繰り
2002年3月
群馬県勢多郡富士見村」

第 15 回
「蘭の輝き」(写真展・雑誌掲載) 田中 弘 子 (たなか・ひろこ)

1942年(昭和17)東京都生まれ。1992年(平成4)から4年間関東デニス協会ジュニアニュース誌広報写真担当以後写真活動を続け、日本写真家協会展などで入賞を重ねる。1998年(平成10)から群馬県の養蚕業の取材を始める。2005年(平成17)「蘭の輝き」としてまとめ写真展と雑誌に発表した後も活動を継続、富岡製糸場世界遺産登録推進運動やシルク関係の著作に作品が使用される。日本写真協会会員、日本カメラ財団JCIIフォトサロン会員。東京都小金井市在住。

この作品は、特別な技法を使って見せるのではなく、蘭を生産する人々と蘭との関係を究明に写し取っています。さらに蘭がいかに成長し、美しい糸になって育っていくか、その過程での造形的な美しさや色彩美の両面を表現しながら、一つの物語に作り上げたところが素晴らしい作品でした。



「陝西省 韓城市 2000年4月(黄土高原の村)」

第 16 回
「黄土高原の村／満蒙開拓の村」(写真集) 後 藤 俊 夫 (ごとう・としお)

1938年(昭和13)茨城県生まれ。茨城大学文学部文学科卒業後、茨城県立高校教員(英語)として勤務、写真部顧問をつとめる。1982年(昭和57)水戸市美術展に初入選。2001年(平成13)中国で独自の取材旅行を始め、2003年(平成15)から翌年にかけて写真展「黄土高原の村」開催、2006年(平成18)写真集「黄土高原の村／満蒙開拓の村」刊行。その後戦後の国内の開拓事業に目を向け、取材活動を続ける。日本写真協会会員、茨城県美術展写真部会員、水戸市美術家連盟会員。茨城県水戸市在住。

大版で映像効果をねらうような意図などはほど遠く、こじんまりしたつくりの写真集ですが、一見、一読、さらに何度か頁を繰るごとに、悠久の大地の中に吸い込まれて、いのちの根源にふれるような感動を覚えます。風土への渴仰と共生に運命を託した農民への共感が伝わってくるのです。



「蘭盆勝会2 長崎市鍛冶屋町、崇福寺
1977年9月」

第 17 回
「長崎フォトランドム—長崎ば撮ってさらき、半世紀—」(写真集) 小 林 勝 (こばやし・まさる)

1926年(大正15)長崎県生まれ。旧制長崎県立長崎中学校卒業。海軍電測学校に進み、長崎外国語学校を経て親和銀行就職。1960年(昭和35)国際写真サロン初入選以後、国画会、二科展、視点展等で入選入賞を重ねる。1961年(昭和36)長崎県展文部大臣賞受賞。1994年(平成6)長崎市教育委員会文化功労表彰。2007年(平成19)長崎大学付属図書館に約4万枚のフィルム原板、プリント写真等を寄贈。2008年(平成20)長崎県民表彰特別賞。林忠彦賞受賞を契機に周防、瀬戸内の歴史に惹かれ周南市周辺の取材旅行を続ける。長崎県長崎市在住。

この方は81歳とは思えない非常に新鮮な目で長崎を見ておられる。現代の長崎とかつての長崎、その時間の併置、これは単に風景を撮るだけといった類のものでは決してなくて、時代の変遷、時代の変化を撮るという明確な意識が感じられる。長崎のとくに被爆の風景を知っている人にとっては複雑な思いがあるでしょう。その辺の心の動きみたいなものがこの写真の中に出ていていると思います。



「壊れた脳とともに生きる—山田規敏さんの暮らし」

第 18 回

「ロマンティック・リハビリテーション〜夢みる力20の物語〜」(写真集・写真展)
大西 成明 (おおにし・なるあき)

1952年(昭和27)奈良県生まれ。早稲田大学第一文学部社会学科卒業。1992年(平成4)写真集『象の耳』で日本写真協会新人賞受賞。1999~2000年(平成11~12)写真週刊誌で連載した「病院の時代—パラッド・オブ・ホスピタル」で1999年週刊現代ドキュメント写真大賞、2000年講談社出版文化賞受賞。他に「日本の川100」『ひよめき』『ザ・モンキー』(共著)『ホネホネたんけんたい』(共著)「人形記」(共著)など。東京造形大学教授。日本写真家協会会員。東京都柏江市在住。

大西さんは、非常にシリアスな問題を、深い人間の理解といったものをベースに誠実に淡々と撮っておられます。決してセンチメンタルに涙を誘うのではない、その辺のギリギリのところを見事に捉えており、大変優れた写真家だと思います。こういう作品が今日の大きな時代の記録として残り、生きていくのだらうと思うのです。大いに賞賛したいと思います。



「田植えの後で」

第 19 回

「トオヌツプ」(写真集・写真展・雑誌掲載) 小栗 昌子 (おぐり・まさこ)

1972年(昭和47)愛知県生まれ。名古屋ビジュアルアーツ卒業。1995年(平成7)写真展「川のほとりで」開催。1999年(平成11)岩手県遠野市の土地と人に魅せられ移住。2005年(平成17)「百年のひまわり」で第3回ビジュアルフォトアワード奨励部門大賞受賞。2006年(平成18)日本写真協会新人賞受賞。2008~09年(平成20~21)写真展「トオヌツプ」開催。2009年(平成21)写真集「トオヌツプ」発行。2010年(平成22)「日本カメラ」1~12月号に「フサバナの山」連載。岩手県遠野市在住。

遠野に住んでいる方々の様々な側面を捉えています。作者が10年住み、その中でコツコツと撮っていったというだけあって、その周辺の方々との間に非常にはつきりとした、しっかりとした人間関係が生まれています。日本の奥深いところにある、日本そのものというものを捕まえようとする意識が、この作品の根底にあるのではないかと思います。



第 20 回

「基隆」(写真集・写真展・雑誌掲載) 山内 道雄 (やまうち・みちお)

1950年(昭和25)愛知県生まれ。1975年(昭和50)早稲田大学第二文学部卒業。1982年(昭和57)東京写真専門学校(現東京ビジュアルアーツ)卒業。森山大道に師事。自主ギャラリー・イメージショップCAMPに参加し写真発表を始める。ストリートスナップの撮り手として活動を続け、東京をはじめ世界各地で街の中の人にカメラを向けシャッターを切り続ける。写真展開催。写真集出版多数。1997年(平成9)写真展「英領 HONG KONG」で第22回伊奈信男賞受賞。2016年(平成28)写真集「DHAKA2」で第35回土門拳賞受賞。東京都杉並区在住。

台湾の「基隆」という街の状況を描写している写真が続き、街の状況を一望できません。斜めの画面や粒子を荒すなどの表現からは、活気のあるざわめき、喧嘩がそのまま伝わってきます。自分の想い出と経験、体験といったものを迫力あるスナップで撮影、素直に表現したドキュメンタリー写真で、見る者を釘付けにします。

<http://michioyamauchi.under.jp/>



「2011年1月31日 墨田区 八広」

第 21 回

「東京 | 天空樹 Risen in the East」(写真集)

佐藤 信太郎 (さとう・しんたろう)

1969年(昭和44)東京都葛飾区生まれ。1992年(平成4)東京総合写真専門学校、1995年(平成7)早稲田大学第一文学部卒業。共同通信社入社。2001年(平成13)同社退社、翌年フリーランスとなる。一貫して都市をテーマに写真を撮り続ける。写真集に「夜光」「非常階段東京—TOKYO TWILIGHT ZONE—」など。他に写真展多数開催。2009年(平成21)「TOKYO TWILIGHT ZONE—非常階段東京—」で日本写真協会賞新人賞受賞。2013年(平成25)林忠彦賞受賞により千葉市第30回教育・文化・スポーツ等功労者表彰受賞。千葉県千葉市在住。

スカイツリーを中心にした極めて都会的な風景写真集といえるでしょう。戦後の古い建物の先にはスカイツリーの上部が見えたりする、味わいのある写真集になっています。スカイツリーの建設をひとつの材料にしながら風景と時間の経過を見ており、東京の極めて重要な「ドキュメント」が全てこの中にあるといえます。

<http://sato-shintaro.com/>

<https://www.facebook.com/shintaro.sato.35>

<https://twitter.com/satoshintaro>

第 22 回

「遠くから来た舟」(写真展)

小林 紀晴 (こばやし・きせい)



(左)「つぶろさし 佐渡・新潟県」

(右)「道ゆき 高千穂・宮崎県」

1968年(昭和43)長野県茅野市生まれ。1988年(昭和63)東京工芸大学短期大学部写真科卒業。1991年(平成3)に新聞社カメラマンを経て独立。2000年~2002年(平成12~14)ニューヨーク滞り。写真家としてだけでなく、小説執筆など幅広く活動。写真集に「Homeland」、「days new york」、「SUWA」「はなはねに」(kemonomichi)など。著書に「ASIA ROAD」、「写真学生」、「父の感懐」、「十七歳」ハッピーバースデー 3.11(共著)、「メモワール 写真家 古屋誠一との二十年」など多数。1997年(平成9)「DAYS ASIA」で日本写真協会新人賞受賞。東京工芸大学教授。東京都在住。

日本というものが地球の中でどういう所に在るのか、その神々というものが私たちの生きる今日にも存在していることが伝わってきます。あちこちの神事やそれにまつわるものが、自分の村や町にも「これはあるね」と感じられます。写真の表現や構成にも工夫があり、白黒やカラー、カラーの中でもハイキーに仕上げた写真、アンダーに仕上げた写真などが混じっていて効果的です。

<http://www.kobayashikisei.com/>

第 23 回

「Remembrance」(写真冊子)

笹岡 啓子 (ささおか・けいこ)



「福島県双葉郡浪江町舘戸 2013年8月2日」

1978年(昭和53)広島市生まれ。東京造形大学卒業。2001年(平成13)写真家北島敬三らと、写真家自身による自主運営ギャラリー「photographers'gallery」を設立参加。「Difference 3.11」を機に2012年(平成24)から2013年(平成25)にかけて写真冊子「Remembrance」を刊行。2008年(平成20)「VOCA展2008」奨励賞受賞。2010年(平成22)日本写真協会新人賞受賞。2012年第12回さかみはら写真新人奨励賞受賞。

「Remembrance」とは記憶ということでしょうか。被災地の瓦礫の写真があります。この瓦礫の写真とそれが取り去られた後の静止した写真、そうしたものがよく表現され、時間的経過の記録がよくわかります。単にドキュメント写真、記録写真というものを越えて、記録の中、風景の中に人間の営みの凄さが感じられます。そういう意味で、時代の記録であり、自然の記録であり、自然の恐ろしさの記録であり、それに立ち向かう人間の力の記録であり、といった様々なことを感じさせてくれます。

<http://pg-web.net/>



[NEW YORK]

第 24 回

「STREET RAMBLER」(写真集) 中藤 毅彦 (なかふじ・たけひこ)

1970年(昭和45)東京都生まれ。早稲田大学第一文学部中退後、東京ビジュアルアーツ写真学科入学、森山大道に学ぶ。在学中より、モノクロームの都市スナップショットを中心に撮影を続け作品を発表している。国内の他、東欧、キューバ、ロシア、アメリカなど世界各地を取材。作家活動とともに、新宿四谷三丁目にギャラリー・ニエブスを運営。2013年(平成25)第29回東川賞特別作家賞受賞。

この作品は、ニューヨークやパリ、上海、東京などを撮影しています。ニューヨークといえば1950年代のウィリアム・クラインの「ニューヨーク」という写真集は、フィルムの粒子をわざと荒らした感じで喧騒を表現し、日本の写真家たちも影響を受けました。中藤さんの粒子を荒らしたような写真が出てきたりすると懐かしさが込み上げてきます。白と黒のコントラストがありながら粒子が粗いというのは、平和な時代というより荒々しい時代を表現する効果があり、ニューヨークや東京のような大都会は、そういう写真を作ることはまだまだ有効だと思います。

<http://takehikonakafuji.com/>

<https://www.facebook.com/takehikonakafuji>

<https://twitter.com/nakafujitake>



第 25 回

「フィリピン残留日本人」(写真集) 船尾 修 (ふなお・おさむ)

1960年(昭和35)神戸市生まれ。筑波大学生物学類卒業。在学中より探検部に所属し、登山の基礎を学び、登山をきっかけに訪れたアフリカ放浪旅行の経験から写真家への道を志す。30代半ばでフリーの写真家・ライターとなり、雑誌等に海外ルポなどを発表。写真集「カミサマホトケサマ」で2009年(平成21)第9回さがみはら写真新人奨励賞受賞。2016年(平成28)第16回さがみはら写真賞受賞。

戦前フィリピンに移住した日本人が結婚し、そこで生まれた子どもたちは戦後、父親が日本人であるということをはっきりと表に出せない過酷な情況が続きました。船尾さんは7年間フィリピンで取材をされ、モノクロームの確かな写真表現により、戦後70年に相応しい第一級のドキュメンタリー作品を制作されました。

<https://www.funaoosamu.com/>

<https://www.facebook.com/osamu.funao.photography/>

<https://twitter.com/funaoosamu>



第 26 回

「TOKYO CIRCULATION」(写真集・写真展) 有元 伸也 (ありもと・しんや)

1971年(昭和46)大阪府八尾市生まれ。1994年(平成6)ビジュアルアーツ専門学校大阪卒業。インド、チベットに撮影に行き、以後数回にわたり撮影のため同地に赴く。1998年(平成10)「西藏より肖像」で第35回太陽賞受賞。東京に居を移し、東京の都市の人々を撮影する。2000年(平成12)から東京ビジュアルアーツ専門学校で講師を務めながら、自身が運営するギャラリーで数多くの個展を開催。2017年(平成29)日本写真協会賞作家賞受賞。

大都会・東京の路上で会った人々を10年以上こつこつと撮影したのですが、モノクロームにしたことによって様々な色彩が消されて行き会った人や光景が際立ちます。作者が、被写体となる人たちとコミュニケーションをとりながら撮影した作品の数々は、重厚感あふれる中でも、大変人間的であり、作品の持つ圧倒的なエネルギーは選考委員会でも高く評価されました。

<https://arimotoshinya.com/>

<https://www.facebook.com/TOTEM-POLE-PHOTO-Gallery-143755425772882/>

https://twitter.com/tppg_news



第 27 回

「川はゆく」(写真集) 藤岡 亜弥 (ふじおか・あや)

1972年(昭和47)広島県呉市生まれ。1994年(平成6)日本大学芸術学部写真学科を卒業後、写真家として活動を始める。2004年(平成16)「さよならを教えて」でビジュアルアーツフォトアワード大賞受賞、2007年(平成19)文化庁新進芸術家海外研修制度奨学生としてニューヨークに渡る。2010年(平成22)日本写真協会賞新人賞受賞。帰国後の2013年(平成25)、生まれ故郷に近い広島に拠点を移し現在も活動を続けている。2018年(平成30)第43回木村伊兵衛写真賞受賞。

「川はゆく」は2016年(平成28)に写真展で発表されました。大きな反響を呼び、第41回伊奈信男賞を受賞しました。2017年(平成29)、新たなショットを加えるなど大幅に構成を変更し、240ページの大作に仕上げたのが本作品です。世界的に注目される都市広島を、そこに住む者ならではの視線で捉えており、客観的でありながらも私的な眼差しで撮影された写真の数々は、臨場感を感じさせ非常に新鮮で、選考委員会でも高く評価されました。

<https://twitter.com/puchipoka>

周南市美術博物館

周南市美術博物館は1995年(平成7)に開館しました。美術、歴史のほか写真の常設展示室「林忠彦記念室」があり、周南市出身の写真家林忠彦の作品や資料を展示しています。また常設展だけでなく企画展においても大規模な写真展を開催し、写真芸術を広く紹介しています。



〈林忠彦記念室〉

写真家林忠彦の芸術と生涯を紹介する常設展示室で、9つのコーナーがあります。



1. 譜

林忠彦の生涯を年譜で紹介

2. 想

秋山庄太郎、植田正治など交流のあった写真家のことばを紹介

3. 撮

「いま」を撮る、「ひと」を撮る、「とき」を撮ると題し、林忠彦の作風の変遷を、当時の雑誌『婦人公論』『小説新潮』などに掲載された作品で紹介



4. 継

アマチュア写真家の育成に力を注いだ林忠彦を記念して、平成3年に創設された「林忠彦賞」を紹介

5. 東海道

晩年の大作「東海道」を紹介
代表作2点と、撮影時に使用したカメラ、三脚、車椅子等を展示



7. ルパン

林忠彦が太宰治らを撮影した銀座のバー「ルパン」のカウンターを再現、雰囲気伝える。「太宰治」「織田作之助」「坂口安吾」を展示



8. 映像コーナー

林忠彦の晩年の姿を「大いなる遺産—林忠彦の世界—」で放映

9. 作品展示

オリジナルプリント等を展示
随時展示替を行う

6. 林忠彦資料

林忠彦が遺したさまざまな資料を、随時紹介



周南市文化会館



周南市文化振興財団は、昭和57年(1982)周南市文化の推進に寄与することを目的として設立、平成25年(2013)公益財団法人に移行しました。現在周南市から委託を受け、周南市文化会館、周南市美術博物館、周南市郷土美術資料館3館の管理運営を行っています。

周南市郷土美術資料館



これまでに公益財団法人周南市文化振興財団が開催した写真展を紹介します。(抜粋)
 末尾が無印は周南市美術博物館、●は周南市文化会館、★は周南市郷土美術資料館で開催した展覧会です。

昭和58年度(1983)

- ◆林忠彦写真展「日本の家元」●
- ◆「林忠彦とイタリアの旅」写真展●

昭和59年度(1984)

- ◆林忠彦写真教室作品展●

昭和63年度(1988)

- ◆昭和史の回顧展「林忠彦50年写真総集展」●

平成3年度(1991)

- ◆林忠彦追悼展「東海道を撮る」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」●
- ◆第1回林忠彦賞「西域—シルクロード」後藤正治●

平成4年度(1992)

- ◆秋山庄太郎写真展「昭和の美女」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の画家108人」●
- ◆第2回林忠彦賞「田園の微笑」捧 武●

平成5年度(1993)

- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の作家109人」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「カストリ時代」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」●
- ◆第3回林忠彦賞「静岡の民家」木村伸久・「たかちほ」田崎 力●

平成6年度(1994)

- ◆林忠彦オリジナルプリント展「小説のふるさと」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「西郷隆盛」●
- ◆第4回林忠彦賞「帰らなかつた日本兵」長 洋弘●

平成7年度(1995) ※9月4日周南市美術博物館開館

- ◆残された楽園 ネイチャーフォトグラフィー展
- ◆第5回林忠彦賞「追いつめられたブナ原生林の輝き」岡田 満
- ◆常設展 林忠彦コレクション「日本の家元」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦時下の日本」「カストリ時代」「日本の作家」「小説のふるさと」「日本の画家」「長崎 海と十字架」「若き修羅たちの里—長州路」「西郷隆盛」より

平成8年度(1996)

- ◆林忠彦×カール・マイダンス展 焼け跡からの半世紀—日米フォトジャーナリストの親た日本
- ◆第6回林忠彦賞「サバノナが輝く瞬間」井上冬彦
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦時下の日本」「カストリ時代」「日本の作家」「小説のふるさと」「日本の画家」「長崎 海と十字架」「若き修羅たちの里—長州路」「西郷隆盛」「織田廣喜」「日本の家元」「茶室」より



「林忠彦50年写真総集展」開会式での林忠彦



「若き修羅たちの里—長州路」チラシ



「カストリ時代」チラシ



林忠彦×カール・マイダンス展

平成9年度(1997)

- ◆美しい記憶 秋山庄太郎展
- ◆第7回林忠彦賞「ぼくは、父さんのようになりたい」井上 暖
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の作家」「若き修羅たちの里—長州路」「東海道」「カストリ時代」「日本の画家」より



秋山庄太郎展

平成10年度(1998)

- ◆立木義浩展「親子の肖像」
- 同時開催「立木義浩の世界 光の人、舌出し天使、エチュード、EVES」
- ◆第8回林忠彦賞「天空の民」清水公代
- 選考委員会特別賞「戦後の山村—学校医のまなざし—」近藤祐一
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「織田廣喜」「カストリ時代」「日本の画家」より



立木義浩展

平成11年度(1999)

- ◆緑川洋一展「山陽道」—歴史薫る陸の道と海の道—
- ◆第9回林忠彦賞「Personal View〔視線の範囲〕」渡里彰造
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道」



星野道夫の世界展

平成12年度(2000)

- ◆星野道夫の世界展 21世紀へのメッセージ—Alaska風のような物語
- ◆第10回林忠彦賞「塩の道 秋葉街道」竹林喜由
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955」

平成13年度(2001)

- ◆細江英公の写真1950—2000
- ◆第11回林忠彦賞「ニューヨーク地下鉄ストーリー」角田和夫
- ◆林忠彦賞歴代受賞作品展
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「文士の時代」「日本の作家」より



細江英公の写真

平成14年度(2002)

- ◆オードリー・ヘップバーン ボブ・ウィロビー写真展
- ◆第12回林忠彦賞「静かな時への誘惑」石川博雄
- ◆秋山庄太郎追悼展「平成 昭和の美女／男の貌」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「文士の時代」「日本の作家」より

平成15年度(2003)

- ◆川端康成 文豪が愛した美の世界(川端康成撮影の写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の家元」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「若き修羅たちの里—長州路」「カストリ時代」「日本の画家」「日本の作家」「文士の時代」「小説のふるさと」より



川端康成 文豪が愛した美の世界より
 川端康成撮影の写真作品

平成16年度(2004)

- ◆第13回林忠彦賞「海を見ていた一房総の海岸物語」飯田 樹
- ◆ハーブ・リッツ写真展
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の画家」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「カストリ時代」「日本の画家」「日本の作家」「文士の時代」「小説のふるさと」より

平成17年度(2005)

- ◆第14回林忠彦賞「古志の里II」中條均紀
- ◆現代美術のABC ～アートはあなたのそばにある～
(佐藤時啓+Wandering Camera, 澤田知子, 野村仁, やなぎみわ, ティヴィッドホックニー写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「カストリ時代」「文士の時代」「日本の作家」「小説のふるさと」より

平成18年度(2006)

- ◆第15回林忠彦賞「薊の輝き」田中弘子
- ◆世界遺産写真展Ⅲ
- ◆第21回国民文化祭・やまぐち2006 美術展「写真」
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「織田廣喜」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「カストリ時代」「文士の時代」「日本の作家」「小説のふるさと」「異郷好日 世界の旅」より
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～15回林忠彦賞受賞作品展」

平成19年度(2007)

- ◆第16回林忠彦賞「黄土高原の村／満蒙開拓の村」後藤俊夫
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「東海道」
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～15回林忠彦賞受賞作品展」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道」

平成20年度(2008)

- ◆第17回林忠彦賞
「長崎フォトランドム-長崎ば撮ってさき、半世紀-」小林 勝
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道」
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～16回林忠彦賞受賞作品展」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦、秋山庄太郎
「秋山庄太郎VS林忠彦 美女・文士」



林忠彦記念室「秋山庄太郎VS林忠彦 美女・文士」



ハーブ・リッツ写真展



世界遺産写真展Ⅲ



第21回国民文化祭やまぐち2006美術展「写真」

平成21年度(2009)

- ◆第18回林忠彦賞
「ロマンティック・リハビリテーション～夢みるカ・20の物語～」大西成明
- ◆常設展 生誕90年記念「林忠彦の世界」
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～17回林忠彦賞受賞作品展」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の家元」「若き修羅たちの里—長州路」「異郷好日 世界の旅」「東海道」「カストリ時代」「日本の作家」より
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の画家」



生誕90年記念「林忠彦の世界」

平成22年度(2010)

- ◆第19回林忠彦賞「トオヌツブ」小栗昌子
- ◆岩合光昭写真展—かけがえのない地球 いのちの輝き—
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「カストリ時代」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「林忠彦と昭和の作家たち」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「若き修羅たちの里—長州路」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮る」★



岩合光昭写真展

平成23年度(2011)

- ◆第20回林忠彦賞「基隆」山内道雄
- ◆林忠彦賞20回記念写真展
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「異郷好日 世界の旅」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「林忠彦の世界I」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「林忠彦の世界II」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「西郷隆盛」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮るII」★



林忠彦賞20回記念写真展

平成24年度(2012)

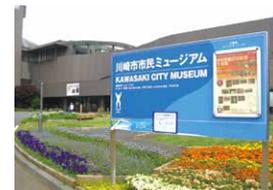
- ◆第21回林忠彦賞「東京 | 天空樹 Risen in the East」佐藤信太郎
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「小説のふるさと第1期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「小説のふるさと第2期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「小説のふるさと第3期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955(1)(ハワイ、ロスアンゼルス)」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955(2)(ニューヨーク、フロリダ)」
- ◆林忠彦写真展「世界と日本のこころ旅 世界編」★



周南市郷土美術資料館
林忠彦写真展「東海道を撮るII」

川崎市市民ミュージアム(2012)

- ◆林忠彦賞20回記念写真展
林忠彦賞が20回を迎えたことを記念し、2011年の周南市美術博物館に続き、開催しました。



平成25年度(2013)

- ◆第22回林忠彦賞「遠くから来た舟」小林紀晴
- ◆周南市誕生10周年記念 岩合光昭写真展「ねこ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「写真集発行30周年記念 日本の家元」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「男の美学」
- ◆林忠彦写真展「日本の画家」★



岩合光昭写真展「ねこ」

平成26年度(2014)

- ◆第23回林忠彦賞「Remembrance」笹岡啓子
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「WOMAN 昭和の女性たち」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道I」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道II」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「西郷隆盛」
- ◆林忠彦写真展「日本の画家」★

平成27年度(2015)

- ◆第24回林忠彦賞「STREET RAMBLER」中藤毅彦
- ◆第17回林忠彦賞受賞者 小林勝写真展「周防長門残照」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955(NEW YORK)」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 戦時下の日本」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 カストリ時代I期 復員、終戦の後」
- ◆常設展 林忠彦記念室 大竹省二「大竹省二氏追悼展示」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 カストリ時代II期 動きだした日本」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 カストリ時代III期 テレビ時代来る」



林忠彦記念室「戦後70年 戦時下の日本」

平成28年度(2016)

- ◆第25回林忠彦賞「フィリピン残留日本人」船尾 修
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「天恩山五百羅漢寺」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の画家I」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の画家II」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「異郷好日 世界の旅I」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「異郷好日 世界の旅II」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮る」★



林忠彦記念室「日本の画家」

平成29年度(2017)

- ◆第26回林忠彦賞「TOKYO CIRCULATION」有元伸也
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」西郷隆盛
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室I期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室II期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室III期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室IV期」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮る」★



林忠彦記念室「茶室II期」

平成30年度(2018)

- ◆第27回林忠彦賞「川はゆく」藤岡亜弥
- ◆常設展 林忠彦記念室 生誕100年 林忠彦の仕事I ~ドキュメンタリー
- ◆常設展 林忠彦記念室 生誕100年 林忠彦の仕事II ~ポートレート
- ◆常設展 林忠彦記念室 生誕100年 林忠彦の仕事III ~風景
- ◆生誕100年 林忠彦写真展「東海道を撮る」★

◆生誕100年 林忠彦展 「林忠彦の世界 それは“昭和”だった」

2018年、林忠彦生誕100年を記念し、周南市美術博物館で210点の作品をはじめ、資料などを展示しました。



※NHK日曜美術館「決闘写真」を撮った男 林忠彦」の中で、本展覧会が紹介されました。(2018年12月9日、再放送12月16日)

ブロンズ像 (裏表紙写真)

林忠彦賞受賞者に授与されるブロンズ像は、周南市出身の彫刻家、笹戸千津子氏によって制作されました。

笹戸千津子

1948年(昭和23)山口県周南市に生まれる。東京造形大学美術学科彫刻専攻に一期生として入学、佐藤忠良に師事する。卒業後同大学彫刻研究室にはいり、1971年(昭和46)第35回新制作展に「き子」「腰かけるき子」を初出品、以後毎年出品を続ける。1973年(昭和48)研究室を修了し佐藤忠良のアトリエで制作を始める。1977年(昭和52)新制作協会会員。全国各地で個展や合同展を開催する。

1987年(昭和62)第18回中原悌二郎賞優秀賞、1993年(平成5)第7回神戸具象彫刻大賞展準大賞受賞。女性像を多く制作し、全国のパブリックスペースに作品が設置されている。



ブロンズ像
笹戸千津子作「爽」

写真展

□東京展 富士フィルムフォトサロン

4月19日(金)→4月25日(木) 会期中無休
10:00~19:00(最終日16:00まで)

東京都港区赤坂9-7-3東京ミッドタウン フジフィルム スクエア TEL(03)6271-3351
<http://fujifilmsquare.jp/>

□周南展 — 林忠彦の生誕地にある — 周南市美術館

5月11日(土)→5月19日(日) 月曜日休館
9:30~17:00(入館は16:30まで)

山口県周南市花島町10-16 TEL(0834)22-8880
<http://s-bunka.jp/bihaku/>

編集・発行／林忠彦賞事務局(公益財団法人周南市文化振興財団)

周南市美術館 〒745-0006 山口県周南市花島町10-16
TEL(0834)22-8880 FAX(0834)22-8886

<http://hayashi-award.com/>   

発行日／平成31年3月31日 印刷／大村印刷株式会社

